

令和七年度

神奈川県公立高等学校入学者選抜学力検査問題

共通選抜 定時制の課程

Ⅱ 国 語

注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題は **問四** まであり、1 ページから **13** ページに印刷されています。
- 3 解答用紙の決められた欄に解答しなさい。
- 4 マークシート方式により解答する場合は、選んだ番号の ○ の中を塗りつぶしなさい。
- 5 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受 検 番 号

番

問一 次の問いに答えなさい。

(ア) 次の a ～ d の各文中の——線をつけた漢字の読み方として最も適するものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|---|-----|------|---|------|---|-------|---|-------|
| a | 昨年 <small>こぞ</small> の夏は酷暑 <small>こくしよ</small> だった。 | (1) | こくしよ | 2 | ざんしよ | 3 | ねっしや | 4 | かくしや |
| b | 家を留守 <small>るす</small> にする。 | (1) | りゆうす | 2 | るしゅ | 3 | りゅしゅ | 4 | るす |
| c | 瓶 <small>びん</small> に牛乳を充填 <small>じゆうてん</small> する。 | (1) | ほじゅう | 2 | ほてん | 3 | じゅうてん | 4 | じゅうしん |
| d | 秋の澄 <small>すみ</small> んだ空を眺める。 | (1) | す | 2 | しず | 3 | く | 4 | にじ |

(イ) 次の a ～ d の各文中の——線をつけたカタカナを漢字に表したとき、その漢字と同じ漢字を含むものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | |
|---|---|---|---|
| a | 書道の大会でキンシヨウ <small>きんしやう</small> をもらう。 | 2 | 司法 <small>しふは</small> の場で無罪 <small>むざい</small> をシヨウメイ <small>しやうめい</small> する。 |
| 1 | 危険 <small>きけん</small> をシヨウチ <small>しやうち</small> の上で挑戦する。 | 2 | この館 <small>くわん</small> では不思議 <small>ふしぎ</small> なゲンシヨウ <small>げんしやう</small> が起こる。 |
| 3 | 家臣 <small>けしん</small> にオンシヨウ <small>おんしやう</small> として領地 <small>りやうち</small> を与える。 | 4 | 立候補者 <small>りくこうしや</small> のエンゼツ <small>えんせつ</small> を聞く。 |
| b | 体操 <small>たいそう</small> のエンギ <small>えんぎ</small> をする。 | 4 | もめ事をエンマン <small>えんまん</small> に解決した。 |

- | | | | |
|---|---|---|--|
| 1 | 海でエンエイ <small>えんえい</small> の練習 <small>れんしゆ</small> をする。 | 2 | 踏切 <small>ふみぎり</small> を渡るときはサイシン <small>さいしん</small> の注意 <small>ちゆうい</small> を払う。 |
| 3 | 食事 <small>しょくじ</small> のエンブン <small>えんぶん</small> を控える。 | 4 | 悪事 <small>あくじ</small> に対してセイサイ <small>せいさい</small> を加える。 |
| c | 両者の主張 <small>しやうしやう</small> を聞いた上でサイテイ <small>さいたい</small> を下す。 | 2 | 結婚指輪 <small>けっこんしゆりん</small> に日付 <small>にふち</small> をコクイン <small>こくいん</small> する。 |

- | | | | |
|---|--|---|--|
| 1 | 部長 <small>ぶちやう</small> ごフサイ <small>ごふさい</small> が式典 <small>しきてん</small> に参列する。 | 4 | 秋 <small>あき</small> にコクモツ <small>こくもつ</small> を収獲する。 |
| 3 | 神社 <small>しんじ</small> でサイレイ <small>さいらい</small> をとり行う。 | 2 | 鐘 <small>かね</small> の音が正午 <small>せいご</small> をツげる。 |

(ウ) 次の各文のうち、敬語の使い方が適切でないものを一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | |
|---|--|
| 1 | 皆様 <small>みなさま</small> から広く意見をうかがいます。 |
| 2 | 私 <small>わたし</small> から事情 <small>しじやう</small> をお話しになります。 |
| 3 | ぜひわが家へお立ち寄りください。 |
| 4 | すぐに資料 <small>しりょう</small> を用意 <small>ようい</small> いたします。 |

(エ) 次の文章中の□に入れることわざとして最も適するものを、あとの 1 ～ 4 の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

多くの本やインターネットで海洋ごみの問題について調べたが、その重大さを実感できなかった。しかし、実際に海岸の清掃ボランティアに参加してみると、ごみの多さに驚き、問題の重大さを実感することができた。まさに□だと思った。

- | | | | |
|---|-----------|---|---------------------------------|
| 1 | 百聞は一見に如かず | 2 | 石の上にも三年 |
| 3 | 鶴の一声 | 4 | 三人寄れば文殊 <small>もんじゆ</small> の知恵 |

- (オ) 次の例文中の――線をつけた「ばかり」と同じ意味で用いられている「ばかり」を含む文を、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

例文 試合はまだ始まったばかりだ。

- 1 あとは彼の到着を待つばかりだ。
- 2 家具を一メートルばかり移動させる。
- 3 今にも踊りださんばかりに喜んでいる。
- 4 買ったばかりの携帯電話を落としてしまう。

- (カ) 次の俳句を説明したものとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

未来より滝を吹き割る風来たる

夏石なついし 番矢ばんや

- 1 頼りない様子で滝から離れるように吹く風を、未来からやってきているとたとえることで、何が起こるかわからない未来が来ることに對する不安を、心情を表す語を用いて描いている。
- 2 滝にぶつかり二方向に分かれて吹く風を、未来から来たと見立てることで、未来は様々な可能性をもっていることを感じさせながら、人々の未来への希望を平易な表現で描いている。
- 3 なだれ落ちる滝を吹き割るほどの風を、未来から吹いてきたとたとえることで、現状が明るい未来に向かって切り開かれていく予感を、句全体に力強さが感じられるように描いている。
- 4 たとえ未来からの風が吹いても動くことのないであろう滝を、人々の揺らぐことのない未来への意志に見立てることで、輝かしい未来への期待を、躍動感あふれる表現で描いている。

問二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

中学一年生で野球部員の「矢ノ浦 会」^(注)は、精神力を身につけるために監督から一時的に弓道部へ入部することを勧められる。不満もあった「会」であったが、野球部を辞めさせるわけではないと言った監督の言葉を信用して弓道部に入部することにした。弓道部では矢を放つまでの基本動作である射法八節の型の練習を繰り返し行なった。一通り型をこなせるようになり、弓に似た練習道具のゴム弓を引けるようになれば、実際に矢を射させてもらえらると思っていた。

ゴム弓の日々が過ぎると、「素引き」が待っていた。道場にある弓のうち、^(注)弦の反動が最も弱いものを使って、射法八節を繰り返す。

もはや目的は自明だろう。ゴム弓によるイメージトレーニングを、よりリアルに近い形へと発展させた訓練だ。ではあるけれど、実際に弓を手にする分だけ、もう「エア弓道」ではないのである。

^(注)玉井が言った。

「野球にも素振りとか、シャドー・ピッチングとか、あるよな。素引きもそんなものだと思えばいい。それしたら、^(注)あだやおろそかにはできないはずだ。」

野球出身者向けに、わかりやすくアドバイスしたつもりだった。だが会はいら立ち、ついに爆発した。

「素振りなんか関係ない！ やっと射法八節を覚えて、ゴム弓だって、あんなにやったのに。いつまでたっても、こんな、遊びみたいなことばかりやらせやがって。」

「それだな、矢ノ浦。素引きからは、この『かけ』が必要に……。」

なおも素引きをやらせようとする玉井の言葉を、会はさえぎった。

「いいかげんにしてください。もう、弓を引かせてよ！」

すると、

「いいかげんにしろとは、こっちのセリフだ。おもしろい。やれるものなら、やってみろ。」

いつの間にか現れた那須^(注)が、静かに言った。県大会の出場選手たちも集まってきた。

「せ、先生！ 初心者いきなり引かせるなんて。」

玉井が止めに入った。だが那須は、

「いいんだよ、こういうやつは口で言ってもわからん。¹弓と矢を貸してやれ。」

と彼を制し、椅子^{いす}の背を抱えるようにして座った。

弓道場は大きく、射手（矢を射る人）が弓を引く板の間の「射場」と、射られた矢が飛んでいく二十八メートルの「矢道」、その先の「^(注)的場」から成っている。この道場の的場には的が六つ。なお矢道には屋根がなかった。

会は射場の左端に立ち、「足踏み」に始まる射法八節の手順にしたがって、真剣に的を狙った。慎重に^(注)「会」を決め、矢を放った。

矢は向かって右の方向に飛んでいく。

「おお〜。」

歓声が上がったが、それは的中を予期したものではない。逆だ。はたして矢は、会の正面にある的の隣の的のはるか手前に、へろへろと落ちた。

「え？ お、おっかしいなあ？ 止まってる的に当てるだけのことが、できないなんて。じゃあ、もう

いっぺん……。」

誰もOKを出していないのに、会はまた別の矢を弓につがえ、放った。結果は最初と同じ。次もダメ。その次も、やっぱり。

「おいおい、どうした？ 自己流でどうにかできるのは天才だけだ。自信過剰とは矢ノ浦、君のことだよ。少しは謙虚にならないと、そのうち誰からも相手にされなくなるぞ。」

「うッ……。」

那須の厳しい言葉に、会は抗えなかった。弓道では何の実績の裏付けもないのに、オレがオレがと思いが上がっている醜態。多少の自覚はあっても、なかなか改められずにいる幼さをもろに見抜かれて、彼は頭にかあつと上つていく血流を感じた。

「あ痛ててッ。」

気がつけば、右手の親指と中指から、血がにじんでいる。素手で弓を引き、矢を放ったせいだ。

「自信過剰はこれだから困る。指を傷めない道具があることも知らない。矢ノ浦、悪いことは言わない。こいつを右手にはめろ。」

那須は苦笑して、革製の、手袋みたいな用具を会に手渡した。「かけ」という。親指と人差し指、中指だけをカバーして、薬指と小指の部分はないのが、普通の手袋と違う。

会はこの「かけ」を装着して、再び的に向かった。だが、五度、六度と繰り返しても当たらない。あさつての方向に飛んでいくばかりだった。

²「こんなはずじゃ、なかったのに。」

何事かをそれなりにがんばってみて、でもこんなにもできないことなんて、会には一度もなかった。

野球のときは、なぜか最初からうまくいった。誰に教わらなくとも、同級生の誰よりも速いタマを投げられたし、打てばけっこう飛ばせた。みんながチャホヤしてくれた。

だから、自分は何でもできるんだ、と思い込んでいた節がある。ところが、どうだ。

弓道では何もできない。周りの誰よりも劣っている。野球ができたのは、「たまたま」でしかなかったということなのだ。

大げさに言えば、生まれて初めての「挫折」か――。

茫然自失。そんなことばかりを思い、うなだれて、身動きもできなくなっていた会に、罵声が飛んできた。

「ほら見ろ。ど素人が、入ったばかりのくせに、でけえ面してんじゃねえよ。」

弓山竜太郎だ。同じ一年生だが、小学生のころから弓道の研鑽を積み重ね、県大会の出場選手に選ばれている。

³ 会は弓山をにらみつけかけたが、止めた。確かに、大きな顔をしておいて、恥をさらしたのは自分のほうだ。いくら悔しくても、何も言い返せなかった。

「何が止まってる的に当てるだけ、だよ。弓道をなめんな。」

弓山が嵩(注)にかかって攻めてくる。彼は脱力してうなだれたままの会に、

「おまえなんか、大事な試合でヘマをして、ピッチャーを辞めさせられたから、仕方なくこっちに来たんだろ。野球部のやつに聞いたぞ。迷惑なんだよ。」

⁴「よしなさい、弓山くん。」

毅然とした声の主は、あの女子部員だった。初めて弓道場を訪れた会が、意味もなく弓をもてあそんでいたときに叱りつけられて、ちよつと、ときめいてしまった。そのあとの稽古で、すばらしくもカッコイ

イ弓さばきを見せてくれた、あの……。

「いきさつはどうであれ、いまの矢ノ浦くんは弓道部の仲間なのよ。どれだけ恥ずかしい振る舞いをしたのかは、彼自身が身にしてみてわかっているはず。もう許してあげなさい。」

⁵「だ、だって、まは的場先輩。」

「そこまで。」

静観していた那須が立ち上がった。

「矢ノ浦。」

声をかけ、道場の片隅を手で示す。と、促されるように会は射場を離れ、うつむきながら、その位置に歩いていった。悔しさと恥ずかしさでいたたまれないはずの自分の心に、どこか清々すがすがしいような感情が芽生え始めていることを、彼は感じていた。

⁶「仲間……か。」

自信過剰で弓道を甘く見て、挙げ句の果てに大恥をさらした自分を、何のためらいもなく、「仲間」だと言ってくれる人がいた。嬉しい。わがまま一杯でいられた野球ではあまり感じたことのない、晴れやかな響き——。

「的場先輩と、弓山は呼んでいた。下の名前はなんていうんだろう。」

そう言えば彼女には、初めて弓道部に来たときにも、強く心惹かれたのだった。そんなことを思い出しながら会は、その場にいる弓道部員全員に——自分をのしる弓山を含めて——己の浅はかさを詫わびなくてはいいけない、詫わびたいと、心から思った。

(斎藤 貴男「正射必中！ 弓道部」から。一部表記を改めたところがある。)

(注) 弦Ⅱ弓に張る糸。

玉井Ⅱ弓道部の上級生。

シャドー・ピッチングⅡ投手がボールを持たずに投球動作を行う基礎練習。

あだやおろそかにⅡいいかげんに。

那須Ⅱ弓道部の顧問。

的場Ⅱ弓道などを練習するために的がおかれている場所。

会Ⅱ射法八節の中の発射直前の状態をとる動作。

嵩にかかってⅡ勢いにつて高圧的に。

(ア) —線1「弓と矢を貸してやれ。」とあるが、そのときの「那須」を説明したものとして最も適する

ものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 「玉井」の指導が「会」の力を引き出せていないことにもどかしさを感じ、「会」に対して自ら指導すること、「会」ならばうまく弓を引けると確信していることを部員たちに示そうとしている。

2 「玉井」の指導によって明らかに自信を失っていく「会」の様子を見逃すことができずに、一度だけでも「会」に矢を射させることによって、「会」の自信を取り戻す手助けをしようとしている。

3 「玉井」の丁寧な指導に従わずに弓を引きたがる「会」の態度を黙って見ていることができず、実際に弓を引くことの難しさを「会」に経験させて、「会」の思ひ上がりに気づかせようとしている。

4 初心者をあからさまに見下したような指導を続ける「玉井」に対していら立っている「会」を見過ごすことができず、「会」に矢を射させることで、「会」の気持ちを落ち着かせようとしている。

- (イ) —線2「こんなはずじゃ、なかったのに。」とあるが、そのときの「会」を説明した次の文章中の
- | | | |
|---|---|----|
| I | ・ | II |
|---|---|----|
- に入れる語句の組み合わせとして最も適するものを、あとの1～4の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

射法八節の型を覚え、ゴム弓も引けるようになり、素引きの練習をしなくても自分なら矢をうまく射ることができると考えていた「会」だったが、失敗を重ねたことで

I

に気づき自分の未熟さを思い知らされた。さらに、弓道では何もできないと感じて、野球をしていたころには味わったことなかった、

II

という気持ちも重なって身動きができなくなっている。

- | | | | | |
|---|---|------------------|----|----------------|
| 1 | I | 自信過剰であった自身の姿 | II | 他の人より劣っている |
| 2 | I | 自分の怒りの感情 | II | たまたまうまくいかないだけで |
| 3 | I | 弓道への自信がなくなっていること | II | もつとうまく教えてほしい |
| 4 | I | 反発する気持ちが生まれてきたこと | II | もつとほめてほしい |

- (ウ) —線3「会は弓山をにらみつけかけたが、止めた。」とあるが、そのときの「会」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 的を射ることができなかったことへの「弓山」からの指摘に対して、素人の「会」にしては上手にできていたという思いもあったが、「弓山」に言い返したところで恥を重ねるだけだと考えている。
- 2 偉そうな態度について「弓山」から大声で非難されて言い返したいと思ったが、「弓山」の発言は「会」の恥ずかしい言動を的確に指摘するものであったため、言われるのも仕方ないと思っている。
- 3 恥ずかしさから弓道場を立ち去ろうとしたことを「弓山」に注意されて反発する気持ちもあったが、「弓山」の指摘は「会」の痛いところを突くものであったため、言い返すのをがまんしている。
- 4 野球をあきらめたことについて「弓山」から批判されて言い返したい気持ちもあったが、「弓山」には「会」の立場を理解できるはずがないと考え、何を言い返しても無意味であると思っている。

- (エ) —線4「よしなさい、弓山くん。」とあるが、ここでの「的場先輩」の気持ちをふまえて、この部分を朗読するとき、どのように読むのがよいか。最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 大きな声で非難し続ける「弓山」と、反論しようとする「会」との対立が大ごとにならないようにしたいという気持ちを込めて、強くはつきりとした口調で読む。
- 2 「会」が聞く耳をもっていないのは明らかであり、「弓山」が指導を続けてもこれ以上の成長は見込めないというあきらめの思いが伝わるように、静かな調子で読む。
- 3 自身の未熟さを自覚しているはずの「会」をこれ以上攻めさせないために、「弓山」の行き過ぎた言動を止めようという思いを込めて、きっぱりとした口調で読む。
- 4 「会」はすでに反省をしていると判断した上で、「弓山」ができることはもう十分にやったというねぎらいの思いが伝わるように、励ますようなやさしい調子で読む。

(オ) ―線5「だ、だって、的場先輩。」とあるが、そのときの「弓山」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 弓道の練習を軽視して矢を射ようとしてもしない「会」を弓道部から追い出そうとしたことについて、「的場先輩」から注意を受けたが、素直に受け入れることができずにうろたえている。

2 弓道経験者である「弓山」が、弓道の楽しさを知ろうともしない「会」に弓道のもつ魅力を伝えようとしていたところを、「的場先輩」に止められたことに対して不満をぶつけている。

3 自分の指導によって、「会」は弓道の技術を上達させることができたという思いがあったが、自分が行っていた指導を「的場先輩」に突然止められたことに戸惑いつつ反発している。

4 弓道に長年とり組んできた「弓山」が、弓道を軽視するような態度をとっていた「会」に対して強い口調で不満をぶつけていたところを、「的場先輩」に制止されて納得できずにいる。

(カ) ―線6「仲間……か。」とあるが、そのときの「会」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 大きな態度をとって恥をかいたことにきまりの悪い思いをしながらも、「的場先輩」の言葉を聞いたことで、わがままを指摘した上で仲間として受け入れてくれる人がいる喜びを感じ始めている。

2 迷惑をかけた自分を仲間と認めてくれた「的場先輩」にこれ以上迷惑をかけないために、弓道部を辞めようとしたが、弓道を教えてくれた仲間たちのことを思い出して切ない気持ちになっている。

3 「的場先輩」が仲間という言葉を自分に向けて発してくれたことで、弓道部員として認められて嬉しい気持ちになった一方で、改めて野球部の仲間のことを思い出してなつかしさがこみ上げている。

4 弓道部員の前で恥をさらしたことで、「的場先輩」がかけてくれた仲間という言葉が慰めにならないほど落ち込んでいたが、自分のわがままを受け入れてもらえて嬉しい気持ちが湧き始めている。

(キ) この文章について述べたものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 野球部では技術的に優れていると言えなかった「会」が、弓道部員として練習をする中で弓道を愛する人々と出会い、過去を乗り越えていく姿を、本音をぶつけ合う会話を通して描いている。

2 思いついていた「会」が、無力感を味わう経験をし、弓道部の先生や部員たちとのやりとりを通して自分の浅はかさに気づいていく姿を、登場人物の会話や心情描写を中心に描いている。

3 飽きやすい性格の「会」が、弓道の上達をあきらめていたにもかかわらず、気持ちを伝えてくれる部員たちとの会話を通して弓道に夢中になっていく姿を、複数の人物の視点から描いている。

4 弓道部の活動を通して、弓道に真剣に向きあうようになった「会」が、最初から弓をうまく引けたことで自信過剰になってしまった自分に気づく過程を、情景描写を中心に描いている。

問三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

遊びとはついそうしてしまうというものであり、考えたり習得したりするようなものではない。裏を返すと、後から技術的に遊びを習得することは難しい。できないわけではないが、困難を伴うだろう。なぜならば、学んだり覚えようと意識したりすればするほど遊びらしくなくなってしまうからだ。今から遊びなさいという指示のもとでは遊びにはならない。思わず浮かんでくるいたずら心、こうしたらどうなるんだろうという好奇心、そういった内側から自然に湧き出るものから遊ばされて遊びは生まれる。思いつきたいから思いつくのではない。つい思いついてしまうのだ。最初の段階に遊びを置くことで、^{おの}自ずと立ち上る自らの感性を肯定し、壊さずに前に進める。

遊びに失敗はつきものだ。先が見えない道を選べば、当然失敗する可能性がある。だが、失敗は悪いことばかりではない。「引つ掛かり」を生むのだ。想像していたのとは違う結果になったのはなぜか。どうしてうまくいかなかったのか。この「引つ掛かり」が推論を引き起こし、失敗の理由を考えつめていくと、それが学びに昇華されていく。

「計画した、そして計画通りになった。」の中には「引つ掛かり」が生まれにくい。A 推論も生まれず、より深く理解することもできない。遊びは軽率さをも含んでいるが、だからこそ計画とは違う行動が生まれ、ときには失敗を引き起こし、それが学びを生み出す。特に経験を積み重ねて何が起きるか予想がつくような段階になると、この遊び的要素の大小によって失敗の頻度が違ってくる。失敗しなくなればそれ以上大きく成長していくことはできない。計画通りに学んでいく世界は、どこかで限界が来るからだ。目的に向けて最適化をしようとする、不規則さが拒否されがちになる。だからこそ最初の段階で遊び心を育んでおく必要があるのだ。

熟達に至る道の第一歩は「遊び」から始まる。最も扱い難いながらも、前に進み展開を広げていく熟達の重要な原動力である。

遊びとは何か。子供が砂場で遊ぶことも、大人がハメを外すことも遊びと呼ばれる。少し余白があることを遊びがあると言い、「少し遊んでみましょう。」という言葉は本来の目的とは関係のない寄り道や無駄な行為を表す。このように遊びという概念は幅広い。

この熟達論の中では遊びを「主体的であり、面白さを伴い、不規則なものである。」と定義したい。

まず遊びは、強制されては成立しない。遊ばなければならないから遊んでいるとすれば、それは義務的な行為になる。自ら行おうとしてこそ遊びは成立する。

面白いからやっているのであって、役に立つからではないのが遊びである。より生産的だから遊ぶ、という理屈は成立しない。結果として役に立つことはあっても、役に立つという理由で遊ぶことはできない。そして、遊びには必ず余白があり、どうなるかわからないところがある。計画してすべてが想定通りに進むのであれば、それは遊びとは言わない。結果として計画通りだったとしても、もしかしたらそうならないかもしれないという不規則さが潜んでいてこそ遊びになる。

このように遊びとは、誰かに指示されるものではなく、役に立てるために行うものでもなく、規則的なものではない。では、遊びは一体何をもたらすのか。

2 遊びは、熟達の道において「不規則さ」を生み出す。遊びがあることで完全な予測が不可能になり、ある状態に継続することが許されなくなる。自分の意図通り動かず、結果を予測できなくなる。これが熟達プロセス全体において大きな役割を果たす。

目標を持ちそこを目指していくことは、何かに最適化されていくこともある。走ることであれば馬の

ように、泳ぐことであれば魚のように、要求される行為に適した形になっていく。そうなるとしても目標が求める条件に自分自身をあてはめていきがちになる。しかし、一度自分を固定してしまえば、そこから発展はない。目標を持ちそこに向けて計画を立て実行することで、私たちは成長していくことができるが、そのこと自体がある枠組みにとらわれる危険を孕んでいる³。

私たちは、未来は予測でき、将来は計画できると思いがちだが、現実にはそんなことはあり得ない。どんな未来予測も、少しの条件の違いで結果が変わってしまうからだ。データは、繋がっている世界の中から一部を抜き出したもので、参考にはなっても世界そのものではない。世界の情報すべてを完全に把握すれば未来の予測は可能かもしれないが、そんなことは不可能だ。

自分自身ですらどうなるか予測できない。技能も実際に前に進んで習得してみるまで、どんな感覚で行なっているのかを知ることができない。あんな風になれたらと憧れている世界と、実際にたどり着いた世界では異なる風景が広がっているものだ。つまり目指す姿を知らないままに、私たちは歩み始めている。始めた当初に思い描いているのは、その時に知っている限られた範囲での到達点だ。

トレーニングの質は二つの要素によって決まっている。「適応」と「馴化^{しゅんか}」だ。人間の身体は同じトレーニングで刺激を加えると、それに対し適応する性質を持っている。腕立て伏せを続けられ、腕の筋肉が太くなり回数をより多く行えるようになるのはそのためだ。部位だけではなく刺激の方向性も同じで、長く走れば長く走れるようになり、力を強く使えば力が強くなる。B 適応していくと、徐々に反応が鈍くなる。同じ刺激を続けていけば身体がそれに慣れてしまい、あまり変化が起きなくなるのだ。それが「馴化」である。これは進みすぎた適応が引き起こしている。

馴化が起きれば、違う類のトレーニングを行う方がより効果が大きくなる。仮にそのトレーニングが本来の競技特性とは違っていても、その方が良い。長距離走者に「馴化」が起きれば、短距離走者のようにダッシュをした方が刺激が大きくなるのだ。言ってみれば「慣れた正しいトレーニングより、慣れていないトレーニングの方が効果が高い。」ということだ。

だからアスリートはある頂点を目指しながら、そこに向けてまっしぐらではなくジグザグに進んでいく。山登りで言えば、山頂を目指しながらも右の方向に進んでいき、大きく振れたあとは左に舵^{かじ}を切り直し進んでいく。まっすぐに頂点に向かえばトレーニングがワンパターン化し、成長が止まってしまうからだ。

私はどのようなトレーニングにも必ず変化をつけるようにしていた。時には競技場を反対回りに走ったり、後ろを向いて走ったり、砂浜を走ることもあった。トレーニングパートナーに頼んで、私が目を瞑^{つぶ}っている間にハードルの位置を前後にずらしてもらうこともあった。同じトレーニングを積み重ねるよりも、不安定にする方が結果として成長し続けられた。何より本音を言えば私自身が飽きやすく、新しいことを行なって自分を飽きさせないようにしたかったからだ。競技人生は短いので、行き詰まったと思ってから変化させるのでは遅い。こちらから変化を生み出し、自分自身が安易に安定しないように常に揺さぶり続ける必要があるのだ。

遊びがなければ、目的に向けて一直線に正しいことをやろうとする。それは自らをしつかりと安定して固定させるには向いているが、上達していくにつれ変化が生まれなくなり、同じパターンを繰り返すようになってしまう。遊びという揺らぎを内側に抱えることで、新しい展開を生む状態でい続けられる。

遊ぶとは広げる行為であり、秩序が固定される前にそれを壊す行為でもある。幅が広がり、違う展開を生む。

それはある目的にまっしぐらに向かうより非効率に思えるが、後から長い目で振り返ると可能性を広げ

る行為になる。遊びがあるからこそ自分の想像の壁を越えられる。熟達プロセス全体にとっての遊びの大事さが想像してもらえるかと思う。

(為末^{ためすえ} 大^{だい}「熟達論」から。一部表記を改めたところがある。)

(ア) 本文中の A・B に入れる語の組み合わせとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|---|-----|---|------|---|---|------|---|-------|
| 1 | A | だから | B | ところが | 2 | A | しかし | B | たとえば |
| 3 | A | さらに | B | つまり | 4 | A | ところで | B | したがって |

(イ) —線1「失敗は悪いことばかりではない。」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 失敗をすることで、原因を追求する力が身につき、それ以上の推論をする必要がなくなるから。
- 2 失敗は、予想もしなかった結果を引き起こすことによって、遊びを生み出すことに繋がるから。
- 3 失敗をすることで、推論を重ねることが無意味だと気づき、実行することの大切さを学べるから。
- 4 失敗は、想定していた結果が出なかった理由を考えるきっかけとなり、学びに繋がっていくから。

(ウ) —線2「遊びは、熟達の道において『不規則さ』を生み出す。」とあるが、そのことについて筆者はどのように述べているか。それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 主体的で面白さを伴うだけでなく、余白を含むという特徴も持つ遊びは、完全な予測をすることができる。できなくなる不規則な状況を作り出すことによって、熟達の道において重要な役割をになっている。
- 2 他者と共有しながら行うように押しつけられるという特徴を持つ遊びは、余白を生み出すことによって、自分一人では到達できなかった結果へ導いてくれるので、熟達の道において不可欠である。
- 3 熟達の道において、主体的に行われるという特徴を持つ遊びは、他者の意図が入り込む余白をなくすことで思いのままに物事を進めていくことができるため、自分の意図を柔軟に取り入れられる。
- 4 熟達の道において、余白を作り出せるという特徴を持つ遊びは、不規則な状況を生み出すこともあがるが遊びを主体的に楽しむように意識することによって、生産性が高い状態を目指すことができる。

(エ) —線3「そのこと自体がある枠組みにとらわれる危険を孕んでいる。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 自分で設けた目標にこだわりすぎてしまうと、考え方が固定化されることによって最適化のための要求にこたえられなくなることに繋がり、自身の成長を止めてしまうかもしれないということ。
- 2 設定した目標を目指すことが、目標の求める条件に適した形に自身をあてはめがちになってしまうことに繋がり、一定の状態を越えて発展する可能性を失わせてしまうかもしれないということ。
- 3 自分の目標に適切でない方法を選んでしまうと、理想の姿を実現するための最適な道筋を想定できなくなることに繋がり、発展するための考え方が固定化されてしまうかもしれないということ。
- 4 要求された目標に向かって無理な計画を立てることが、最適化のための条件からはずれていってしまうことに繋がり、結果的に成長することができなくなってしまうかもしれないということ。

(オ) ―線4「目指す姿を知らないままに、私たちは歩み始めている。」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 未来を正確に予測した上で物事を進められるということはあり得ないため、最初の段階で思い描いていた自分が憶れている姿を忘れてしまった状態で、実際に物事を進め始めているということ。
 - 2 未来は条件の違いによって結果が変わるものであるが、どのような感覚で技能が習得されていくかについては予測できるので、現時点の感覚にもとづいた理想の姿に向かって動き始めるということ。
 - 3 事前に想定できることは限定的であり、未来を完全に予測することは不可能であるため、実際にたどり着くまでは自分の姿がどのように変わるのかわからない状態で物事を進めているということ。
 - 4 すべての情報を完全に把握することによって未来予測は可能になると考えられるため、理想とする姿を実現できなかった自分を想定する必要はなく、目標に向かってひたむきに行動するということ。
- (カ) ―線5「私はどのようなトレーニングにも必ず変化をつけるようにしていた。」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 馴化した状態を乗り越えながら適応していくことを目指す中で、同じ方法を継続しつつより負担を増やしたものに変わっていくことによって、成長の効果を最大化させられると考えているから。
 - 2 馴化した状態を保つことにより効率化を目指していく中で、あえて慣れていない方法で適応させていくことによって、より大きな変化を見込むことができ効果的であると考えているから。
 - 3 進みすぎた適応が引き起こす馴化によって成長を促す効果は表れにくくなるが、自分が慣れ親しんだ方法で改めて実行し直すことで、飽きずにトレーニングを続けられると考えているから。
 - 4 自身が飽きないようにすることに加えて、意図的に不安定な状態を作り、進みすぎた適応が引き起こした馴化を解消するために刺激を変化させることで、成長し続けられると考えているから。
- (キ) 本文について説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 遊びと熟達の関係や、遊びの特徴を具体的に説明しながら、遊びの持つ不規則さこそが人を成長させることもあると指摘し、楽しく遊ぶことを目標とすることの大切さについて述べている。
- 2 熟達論における遊びの意味を定義づけし、遊びがあることによる不安定さに触れた上で、非効率に思える遊びが、熟達の過程で自己の成長の可能性を広げてくれるということを述べている。
- 3 遊びの特性を詳しく分析した上で、遊びの持つ不規則性に注目しながら、遊びは熟達の過程において秩序を乱す可能性があることと指摘することによって、遊びが持つ危険性について述べている。
- 4 熟達論における遊びの意味と、一般的な遊びの意味の違いに注目し、一貫性のある目標を設定することによって、最適化された状態で効率よく熟達を目指していけるということを述べている。

問四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

江戸幕府の老中である「楽翁公」が、お供の者を連れて蕎麦屋に入り、店の「老翁」に「越中様（楽翁公の別名）」の行方改革について、身分を明かさなまま感想を尋ねた。

老翁は、この二人連れの一人が、当時日の出の閣老にて、空飛ぶ鳥をも落とす越中様ならんとは、夢にも心付かざりけるゆゑ、^ア「然ればなり、喜ぶ者は世の中の着実質素になりたるを喜ぶならん、迷惑する者はわがまま勝手の自在になり難きを迷惑するならん。喜ぶ者と迷惑する者との多少は暫くおき、田沼が遣り崩したる政治を、思ひ切つて改革せられしは、とにかく結構なることと言はざるべからず。併し好事魔多く、物事変はりやすきは世の中の習ひなれば、越中様も懷囊が少しく温まると、必ず田沼の二の舞をなし、今日の譽を明日の毀と流すならん。わたしが越中様の御家来なれば、その辺は抜け目なく釘を打つべきなれども、恐らく越中様にはその様な御家来はあらざるべし。」とおどけ混じりに述べ立てたり。

楽翁公は終始黙して聞き居られしが、その夜はそのまま帰館せられ、翌日伴の老翁を呼び出だせり。蕎麦店の老翁は、如何なる御用にて御大老のお召しを蒙りたることなりやと、疑惑を抱きて奥庭に回り、恐懼ながら首をもたげしに、図らざりき昨夜店前にて雑談せし客人が、素袍大紋の装束にて、巖然上座に現はれければ、忽ちにして驚き、忽ちにして怖れ、一言半句の言葉も出でず、唯その場に俯伏して、恐れ入る由申し上げるに、楽翁公莞爾として笑ひ、「否汝謝するに及ばず、余はかへつて汝に謝するなり。汝の語りし如く、人といふものは、油断の生じやすきものにて、少しく懷囊の温まる時は、端なく種々の欲心を起こし、終にその生涯を誤ること、古来その例少なからず、汝殊勝にも善き戒めを余に聞かせたり。余は汝の功を嘉し、汝を召し抱へ遣はすべし。」とて、直ちに扶持米を給与せられたり。この老翁、公の気に入る、公の上方へ上らるる時も、朱鞘の刀を腰にして、お供しけるとぞ。

「想古録」から。

(注) 田沼Ⅱかつて老中として政治を行った田沼意次(一七一九―一七八八)のこと。

素袍大紋Ⅱ武士が身につけていた格式の高い服。

扶持米Ⅱ家臣に支給される米。

公Ⅱここでは、楽翁公のこと。

上方Ⅱ京都及びその付近。

(ア) 〰線ア～エの中から、他と主語が異なっているものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

1 ア 2 イ 3 ウ 4 エ

(イ) 〰線1「結構なることと言はざるべからず。」とあるが、そのように言ったときの「老翁」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「田沼」の政治によって勝手な行動が許されなくなったことについて、一定の評価をしている。
- 2 「田沼」の政治で世の人々が質素な暮らしを重んじるようになったことを、うれしく思っている。
- 3 「田沼」による政治の良い点を引き継いで「楽翁公」が改革を行ったことを、高く評価している。
- 4 「田沼」によって混乱させられた政治を「楽翁公」が改めたことについて、立派だと認めている。

(ウ) 〰線2「恐れ入る由申し上げるに」とあるが、そのときの「老翁」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「老翁」は、昨日出会った「客人」と「楽翁公」が同一人物であることに気づいて動揺するとともに、出過ぎた態度を「楽翁公」がとがめる言葉をぶつけてきている状況を恐ろしく感じている。
- 2 「老翁」は昨日、町中で「楽翁公」の良くないわさを「客人」に流したことが発覚して呼び出されたと思い込んで恐れおののき、心から謝罪することで「楽翁公」に許してもらおうとしている。
- 3 「老翁」は昨日、「楽翁公」だと思って話をした相手が実は「楽翁公」の家来であったことに驚くと同時に、政治についての意見を「楽翁公」に伝えられなかったことをうしろめたく思っている。
- 4 「老翁」は昨日偶然出会って、雑談をした「客人」が「楽翁公」であったことに気づいて驚くとともに、「楽翁公」の行った改革や今後のふるまいについて意見してしまったことに恐縮している。

(エ) 〰線3「汝殊勝にも善き戒めを余に聞かせたり。」とあるが、そのように言ったときの「楽翁公」を説明したものとして最も適するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 人間は油断をしやすい生き物であって、金銭的な余裕が出ると人生を誤ってしまうこともあるという「老翁」の話を、優れた助言として感心しつつ受け止めている。
- 2 油断しないことで安定した人生を送ることはできるが、欲を抑えるとかえって人生を誤ることもあるという「老翁」の話を、素晴らしい助言として受け止めている。
- 3 人の考えは変わっていくものであり、人生での失敗も時代の価値観が変われば評価されることもあるという「老翁」の教えを、一つの助言として受け止めている。
- 4 欲望に素直に生きていくことで豊かな人生を送ることができるが、油断をすると失敗してしまうこともあるという「老翁」の助言を、共感しながら受け止めている。

(オ) 本文の内容と一致するものを次の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「楽翁公」は、店の中で「老翁」と雑談を交わした際に得意げな様子で語られた政治の改革案や、「老翁」の人を観察する鋭い視点をほめたうえで、無礼を許した上でほうびを与えて家来にした。
- 2 「楽翁公」は、人間は気の緩みから評判を落とすことがあるので戒める存在が必要だという、人間の本質をついた蕎麦屋の「老翁」の話に納得して、「老翁」にほうびを支給した上で家来にした。
- 3 「楽翁公」は、町中の蕎麦屋で政治について語り合った「老翁」に、自身の政治が絶賛されたことに気をよくして、翌日「老翁」の自宅を訪れて自分のそばに仕える家来として雇いたいと伝えた。
- 4 「楽翁公」は、町中で改革について話し合った「老翁」が、政治についての話をするために自宅をたずねてきた熱心さに深く共感し、「老翁」にほうびを与えた上で家来として雇うことにした。

(問題は、これで終わりです。)

氏名

受 検 番 号						
0	0	0		0	0	0
1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2
3	3	3		3	3	3
4	4	4		4	4	4
5	5	5		5	5	5
6	6	6		6	6	6
7	7	7		7	7	7
8	8	8		8	8	8
9	9	9		9	9	9

受検番号は左から書くこと。

問一

(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)				(ア)			
				d	c	b	a	d	c	b	a
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4

カは四点、他は各二点

問二

(キ)	(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4	4

各四点

問三

(キ)	(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3
4	4	4	4	4	4	4

アは二点、他は各四点

問四

(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
1	1	1	1	1
2	2	2	2	2
3	3	3	3	3
4	4	4	4	4

各四点

注意事項

- HBまたはBの鉛筆(シャープペンシルも可)を使用して、○の中を塗りつぶすこと。
- 答えを直すときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。
- 解答用紙を汚したり、折り曲げたりしないこと。

良い例	悪い例		
	 線	 小さい	 はみ出し
	 丸囲み	 レ点	 うすい

Ⅱ 国 語

正 答 表
(令和七年度)

問二						
(キ)	(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
2	1	4	3	2	1	3
4点	4点	4点	4点	4点	4点	4点

問一											
(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)				(ア)			
				d	c	b	a	d	c	b	a
3	4	1	2	1	4	2	3	1	3	4	1
4点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点	2点

問四				
(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
2	1	4	4	3
4点	4点	4点	4点	4点

問三						
(キ)	(カ)	(オ)	(エ)	(ウ)	(イ)	(ア)
2	4	3	2	1	4	1
4点	4点	4点	4点	4点	4点	2点